

地域経済ウォッチング

いわき民報 2010年8月26日(木曜日)

韓国で見つけた日本 —韓国在外研究からの報告—

日本文化の受け入れは対等関係意識の表れ

日韓文化交流 活発化の背景とは

東日本国際大学経済情報学部准教授

山田 紀浩

現在、韓国の成均館大学での在外研究にある。成均館といえば韓流ファンならば、ペ・ヨンジュンの母校であるとピンとくるはずだ。2年位前までは、ここにアジア系の彼のファンが観光バスで写真撮影に来たという。実は東日本国際大学と成均館大学は姉妹校なのだ。そのためこの夏の約3ヶ月間、小生が世話になっている。

話は変わるが、韓国での古い付き合いがある友人に“韓国社会の中での日本を探しているが、何かないか”と聞いてみた。“日本パワーも落ちているこの時代に、そんなものないよ”という答えが返ってきた。90年代の大統領選挙の時には、日本が後ろで操作し某大統領を当選させたのではないかと疑心暗鬼であった彼がである。その友人も今ではソウル市内の著名大学の教員である。

確かに韓国国民は1963年以来の経済開発計画が功を奏し、高度経済成長を果たし、経済的な自信を深めた。また1987年の民主化宣言以降には、市民運動による政治参加の結果、国民の力で政治は変えられるという政治的な自信も深めている。そのためなのか、斜陽な日本経済や政治には、もはや頼らずとも良しとする自信の表れなのかとも思った。

学生によるある日韓ワークショップでは、かつては出来るだけ日本の事例を学ぶよう指導していたものだが、今では“我々は我々の事例を発表すればいい、それが互いの勉強になる”と指導している。政治経済ばかりでなく、教育や社会科学の分野においても力を付けた自負があるようだ。ただ、現在の日本の姿は近い未来の韓国の姿であり、反面教師とすべきとの声は上がっている。

しかしこうした韓国パワーそして自信の向上は、逆に日本文化の収容を容認することになったようだ。韓国社会での日本文化の開放は、正式には 1997 年に就任した金大中大統領政権からである。もちろんそれ以前から、非公式あるいは海賊版として日本映画、ドラマ、雑誌等、日本文化は入っていた。しかし正式な受け入れには多くの憂いと議論があった。そして決定後にも一気にではなく、数年そして数次の段階を経ての開放が決まった。特にアニメは一番最後に回された。

韓国では、20 世紀の前半には日本の植民地政策に遭い、全ての統治権を奪われた。また 20 世紀の後半期にはアジアで唯一世界経済を牽引した日本経済に依存を余儀なくされ、このとき韓国国内では、日本による経済的な植民地ではないかとささやかれていたこともあった。そのため 97 年の日本文化の開放論議の時には、今度は文化的な植民地になるのではないかと声が上がった。ただ、97 年の第一次日本文化開放では、映画は世界 4 大映画祭で受賞した作品と限定された。韓国の芸能界が戦々恐々とする中、この時の第一号が北野武監督の映画であった。この映画のプロの評価はさておき、小生のような凡人にはよく分からない。この感覚が一般の韓国人にも同じであったかはさておき、日本映画を開放しても、悪阻るるに足らずとなったようだ。その後の日本文化開放は比較的スムーズに進み、現在ではケーブルテレビの映画では、ヒット作でもない普通の日本作品も流されている。

また大学の周辺を歩いただけでも、特に日本食関係の飲食店の多さには驚かされる。回転すし、とんかつ、おにぎり屋、日本式ラーメン、日本式カレー店などや、日本語で標記さ

れた店が目立つ。約 10 年ぶりの長期滞在になるが、かつて大学周辺にこんな看板はなかった。“韓国社会の中に日本はないよ”と言い放った彼の言葉は、植民地時代の頭からの押し付け、力あるものへの従属として現れる日本がないという意味に解釈できそうだ。力を付け自信を得た韓国は、自然に受け入れるものは受け入れている。これは強圧的でも従属的でもない、対等関係の意識からの受け入れであるようだ。昨今、韓国文化が日本に随分入ってくるようになったが、日韓の文化交流は今後ますます活発になりそうだ。

ところでここでの研究では、韓国での学問の歴史及び日本への影響に触れたりもするが、ただ日本の学問的蓄えの多さには改めて関心する。斜陽する日本経済、政治であるが、それら膨大な知識の蓄積は、現在の日本社会の停滞を許さないのではなかろうか。

今回の在外研究では、日韓の先人の研究に触れるたびに叱責されているようだ。

(本コラムは本年度秋開講予定のいわきヒューマンカレッジ「現代アジア学部」の内容と一部連動しています。)